

馬場毅・許雪姬・謝国興・黄英哲編

近代台湾の経済社会の変遷

—日本とのかかわりをめぐって

東方書店／2013年11月／560頁／6000円＋税



やまだあつし

本書は、二〇一二年八月四～五日の愛知大学名古屋校舎での「近代台湾の経済社会変遷——日本とのかかわりをめぐって」シンポジウムをもとに、中央研究院台湾史研究所（主題計画「戦後台湾の歴史における多元的な象徴及び主体の創造」）、愛知大学東亜同文書院大学記念センターそして東方書店の提携により日本語で刊行されたものである。

内容は許雪姬「序文」にある通り、（一）近代台湾の経済・法制・文学と文化の変遷、（二）台湾の被植民時期及び戦後における官僚の流動と再建、（三）東亜同文会・東亜同文書院と近代の台湾・日本、（四）北部角板山のタイヤル族の戦中と戦後、の四つのテーマに分かれ、日本と台湾の各研究者が執筆している。中国閩台縁博物館館長の論文も一本収録されており、書名の通りに近代台湾の経済社会の変遷を広く多面的に論じるものとなっている。

本書はテーマ的には広く四つに分かれ、さらに書中の構成は馬場毅「序文」が紹介するシンポジウムの構成にならつ

て、六つの部から成り立つという大部なものである。その全体像を紹介するため、本評でも最初に各部ごとに論文の内容を概観し論評した上で、全体についての評価を行いたい。

第一部「東亜同文会・東亜同文書院と近代日本・台湾」は三論文からなる。馬場毅「東京同文書院について」は、東亜同文会が中国人（清国人）留学生の教育を行った東京同文書院についての紹介である。単に書院の中国人教育を論じるだけでなく、ファン・ボイ・チャウらベトナム人独立運動家が東京同文書院で学んだことについても言及があるのは興味深い。武井義和「東亜同文書院で学んだ台湾人学生について」は、どのような台湾人学生が学んだか、それら学生の卒業後の進路はどのようなものだったかについての分析である。東亜同文書院は、上海にあり大旅行を行うなど学費が高かったため学生の大半が府県費生（府県からの派遣学生）であった。その中において台湾人学生は私費生が多かった。私費生が多い理由を、著者は台湾人の高等教育の進路が

限られていたためとしている。しかしながら東京の私立大学・専門部など他にも進路はあり多くの台湾人が進学していたので、その中で特に東亜同文書院を選んだ理由について、もう少し明らかにして欲しかった。佃隆一郎「台北帝国大学から愛知大学へ」は、愛知大学の創設に際し、母体的存在として東亜同文書院や京城帝国大学と並んで言及される台北帝国大学について、実際に台北帝国大学から愛知大学にどの程度の教員や学生が移ったのかを調査したものである。愛知大学はいわゆる文系学部で発足したため、理系学部が充実していた台北帝国大学からの移籍は少なかつたが、経済学の小幡清金を中心にある程度の存在感を示していたことを論じている。テーマの関係上仕方ないかと思うが、台北帝国大学からの移籍という観点ならば、近隣にも岐阜大学とか名城大学に複数の教員が移籍している。さらに初代学長が台北帝国大学出身の県立兵庫農科大学（現・神戸大学農学部）も無視できないであろう。それら大学の中での愛知大学についても考えた

いところである。

第二部「近代台湾法制の伝承と変容」は三論文からなる。王泰升（村上亨二訳）「台湾における中華民国法制の「脱内地化」の進展と限界」は、中国全体をその領域としていた中華民国政府が、一九四九年の遷台以降にあるべき領域と実効支配領域のずれ、そしてあるべき領域で行うべき毎回の選挙をどう弥縫していったか、そして台湾しか実行支配していかないという現実が法制が対応して行く「脱内地化」をどう進展させていったかを分析している。注目したいのは一九九〇年代である。万年議員の退職など一見すると「脱内地化」が進展したようにいて、完全なる台湾化には様々な限界があったことを本論文は示している。この議論は二〇一〇年代以降を見据えていないが、ちょうど今年（二〇一六年）は蔡英文の民進党政権が成立した年である。陳水扁政権と違い立法院での与党過半数に支えられた蔡政権の下で、今後の法制がどうなっていくのか注目したい。曾文亮（加藤紀子訳）「戦後初期台湾人群分

類の調整及び法律効果——一九四五—一九四九」は、台湾に居住していた人および在外（この場合は在日）台湾人が、一九四五の日本の敗戦によりどうその身分を定義し直され、どのような状況に置かれたかの解明である。台湾（中華民国）は血統主義により、一方で日本では戸籍主義がとられたことによる差異、そして養子の扱いや父母の血統による混血児の扱いの差異など、様々なグレーゾーンがどう処理されたかがわかって面白かった。本論文では言及していないが、

第六部の菊地論文が扱ったロシン・ワタンが、本籍地愛媛県の日野三郎（日本人妻の家へ入婿した結果）から、山地同胞の林瑞昌になったことも、これら身分の定義し直しの一つである。なお本論文の訳は、法律の論文であることを割り引いても理解し辛かった。劉恒奴（大野絢也訳）「戦後台湾の司法における日本の要素——司法人材養成の背景を中心として」は、大法官など台湾の司法要職にいた人材が、どの程度日本の教育を受けていたかを検討している。台湾人の司

法人材は省別の割り当てがあったため人数が限られていたものの、他にも東北出身者中に満洲国での日本的な教育を受けた人材がいた（そしてその経歴を当事者は明らかにしたくなかった）ことや、日本的な教育を直接受けなくても、戦前から戦後を通じて、法律教科書は取り上げられた事例などで日本的要素が濃く、それら教科書での学びの影響もあったことを指摘しているのは興味深い。

第三部「近代台湾文学・文化の変遷」は四論文からなる。陳培豊「歌を聴いて字を識る」——日本統治下の台湾歌謡と文芸大衆論争」は、一九三〇年代台湾の文学運動を歌謡の面からとりあげた好論文である。文学研究は書店や図書館に並ぶ書物や雑誌、そして新聞小説ばかりの議論になりがちである。今日でもそこにインターネットが加わっただけである。しかしながら、歌謡もたしかに一種の文学である。レコードが普及した時代であってみれば、レコード歌謡にどう文学者が関与したかだけでも論文になるところだが、本論文はさらに文学運動の手

段として歌謡を捉えた人々の活動とその「成果」と限界を紹介しており、なおさら意義深い。言うまでもないが、レコードは曲を楽しむために買うものであって、文字を覚えるために買うものではなかった。文学運動者の活動が惨敗に終わったことを評者は納得できる。黄美娥（三好洋子訳）「台湾文学」と「中国文学」の接木及びそれに関連する言語と文字の問題——戦後初期の国語運動から論ず（一九四五—一九四九）」は、国語運動とそれへの台湾語や注音字母の関係を、推進者である魏建功らの言行から扱ったもの。これについては編者の黄英哲をはじめ、今までも多数の議論があり、その中で何が新しいのか評者にはわからなかった。工藤貴正「台湾新文学運動と厨川白村——西欧普遍主義の概念を超克する「大正生命主義」を視座に」は、日本では忘れ去られているにもかかわらず、中国では再三取り上げられ各時代に影響を与えている厨川白村について、台湾ではどのように影響したのかを紹介している。興味深かったのは、

台湾へは日本から日本語書籍で直輸入したのではなく、中国での厨川受容を経て中国語で間接的に渡来していることである。李衣雲（武井義和訳）「日本統治期視覚式消費と展示概念の出現」は、他の三論文が何等かの形で文学に言及しているのと違い、専ら文化としての商店の展示を論じる。本論文はまず、日本での伝統的な商店の販売法（商品は客の求めに応じ、奥からその都度出してくる販売法）が、博覧会の売れ残り品販売場（勸工場）での博覧会式展示をきっかけに商品を店頭・店内へと展示する形へと変化して、近代百貨店が誕生したことを紹介している。そして、そのような商品展示が台湾へどう流入したかを、台湾での日本人商店の展示方法の推移と、台北と台南の百貨店（特に二〇一四年に復元された、台南の林百貨店）の実態から論じている。議論としては首肯できるものがあるが、できれば台湾での（前史を含めた）博覧会の展示との関連についても言及して欲しかった。台湾は一九〇〇年代以降、共進会が各地で開催されていた。

その多くは品評会の類であったが、展示という点では博覧会に範をとったものであった。そして日本の博覧会は長らく商品展示とともに即売の場であり続け、一九三五年の台湾博覧会にいたっても、展示専門の会場と展示に凝りながらも商品即売を中心とする会場が共存し続いていた。例えば評者が『中国と博覧会』（柴田哲雄との共編著、成文堂、初版二〇一〇年）という本で書いたように、愛知県は台湾博覧会で名古屋城を模した（つまり建物にも凝った）愛知名古屋館を設営し愛知県の物産を大々的に販売した。これら博覧会の展示と経験は、無視できないものがあつたのではないか。

第四部「近代台湾の経済変遷」は四論文からなる。黄紹恒「日本植民統治初期（一八九五―一九二一）における三井物産台北支店及びその砂糖交易に関する一考察」は、台湾製糖株式会社（日本資本で最初に台湾に新式製糖を営む）の設立母体である三井物産自身にとって、砂糖とはどのような商品であり、台湾製糖株式会社はどのような存在であつたかを日

本の糖業市場全体の中で分析したものである。植民地期台湾を研究していると台湾製糖株式会社の存在の大きさに幻惑され「国策会社」という台湾製糖の自己規定に納得しがちであるが、著者が指摘するように事実はずつと違っていた。三井の糖業への投資は台湾製糖株式会社以外にも多岐にわたるし、また商品として三井は台湾赤糖なども取り扱っており、一九〇〇年代の三井物産において、台湾製糖株式会社は唯一無二の存在では決してなかつた。謝国興（佃隆一郎訳）「戦後初期において台湾中小企業が植民地時代から継承したもの」は、著者が長年にわたって研究している台湾の中小企業（および中小企業から発展した大企業）研究の成果である。一九五〇年代の台湾経済発展については、公営企業の成果を強調する見解と、中小企業の発展を強調する見解があるが、本論文は中小企業の日本統治期からの継承という点をあらためて整理し論じている。李為楨「戦後初期台湾における産業組合の改組及び発展に関する考察」は、戦前の産業組合が、日本統治末

期の戦時体制そして戦後の接収によりどう改組させられていったか、その過程で中国の金融制度からどのような影響があったかの分析である。台湾総督府殖産局商工課が管轄する産業組合は、台湾総督府殖産局農務課の管轄する農会と管轄機関が異なるにもかかわらず、ともに農村で活動していたため戦時体制下で農業会に統合させられた。戦後初期の接収過程で、行政長官公署は一九四六年一〇月に合作社（産業組合に相当）と農会とを分離させたものの、財産の再分離の問題と農会の補助金不足による経営難のため一九四九年一二月に再度統合され、農村の合作社は農会信用部になったことを紹介している。なお中国の影響を見る際、日本の農村の産業組合が、一九四三年の農業団体法による農業会への再編を経て一九四八年に農業協同組合へと移行したのと何が違うのかを比較できると、より影響の意味づけができるように思う。楊彦杰（小嶋祐輔訳）「百年の養殖漁場——清代東石蔡氏による台湾での養殖漁場経営」は、福建省で発掘した清代の帳簿類

をもとに、台湾東石での養殖漁場経営の推移を分析したものである。歴史学の醍醐味は新資料を発掘しそれをどう解釈するかにあるが、清代台湾についてもこんな資料がまだあることに興奮させられた。本論文は、近代や日本とはほとんど関わっていないが、その前史として意義あるものである。大小の税（税金ではなく、収益を得る権利）のあり方など、今まで論じられていた清代農業史のそれと今後も多様な比較検討ができるだろう。なお三六〇頁の晋江氏は晋江市が正しい。第五部「植民地・戦後における官僚の流動」は、三論文からなる。許雪姬（湯原健一訳）「満洲国政府における台湾籍高等官（一九三二—一九四五年）」は、謝介石ら台湾出身者が、満洲国でどのような官職についたかを分析している。著者の長年の満洲における台湾人の活動研究の成果を活かしたものである。なお四二頁の試補の制度は、満洲国の独創でなく例えば若槻礼次郎（第二五・二八代内閣総理大臣）は一九九二年に大蔵省の試補となっている。恐らく、試補を高等

官と判任官にわけ、さらに大同学院での教育と組み合わせたことを独創と言っているのだと思うが、やや引つ掛かる表現である。湯原健一「技術系植民地官僚の形成と交流——中村与資平、相賀照郷の手がかりに」は、建築家の中村と、（事務官ではあるが）満洲での水利に関連する業務に携わったことが、台湾に転じてから土木部という技術者集団の部長として活躍することに繋がった相賀について、それぞれ分析したものである。技術系官僚という場合、評者もそうだが札幌農学校閥に代表される技師（「技官」としての技術系官僚に注目しがちである。ただ官僚組織は技師一人では動かない。下には多数の属や技手を抱え、さらに上には相賀のような技術者集団との付き合いが長い事務官がいて初めて動くものもある。だから相賀のような人物にもっと目を付けるのは意味あることである。薛化元（野口武訳）「水利会組織の変化と人事変遷——台湾地方エリート断絶と連続の一考察（一九四一—一九五六）」は、著者らのグループが推進している水

利組織の人的変遷についての議論である。植民地期末期に統合された水利組織における台湾人が、戦後の接収と組織改編によってどの程度の人数が、戦前から継続して水利組織に関与できていたのかを分析している。面期となったのは、一九五六年からのいわゆる「改進」と呼ばれる国民党による水利会の制度変革と権力掌握過程であり、これを乗り越えて戦前から水利組織に関与し続けることができた人物は少数であった。

第六部「戦後再建」は、二論文である。鍾淑敏「戦後日本における台湾協会の再建——引揚から一本化まで」は、台湾引き揚げ者の団体的変遷を紹介している。台湾から引き揚げた日本人は、日本での新たな生活基盤の確保と、台湾に残してきた財産の返還をめぐる各種団体を組織して運動を行った。その運動にはあれこれ対立があった。さらには特殊精算（外地会社の債務を日本にある資産で支払い、残余財産があればそれをもとに新たな会社を発足させるもの、台湾銀行から日本貿易信用への移行が有名）のあ

り方をめぐっても対立があった。それが一九六三年によりやく一本化したことを紹介している。勉強になった反面、朝鮮との比較を加味したい議論でもあった。菊池一隆「台湾北部角板山タイヤル族の

戦中と戦後——ロシン・ワタンを中心に」は、今までの各論文が（曾論文を除き）原則として平地の議論であったのに対し、山地にとって原住民にとって戦中と戦後は何であったのかを、タイヤル族のロシン・ワタン（日本名は日野三郎、中国名は林瑞昌）から論じている。ロシン・ワタンは、日本植民地時代は日本の政策を肯定した上で、その枠内で原住民としてどのように生き残るかに尽力していた。いわば改良主義者であった。戦後のロシン・ワタンは、接収の問題や経済混乱による山地の混乱を目にし、日本と比較しながら国民政府の統治を批判したため、（批判だけでなく、国民政府との融和に努力していたにもかかわらず）神經過敏となった国民政府による「白色テロ」にあい一九五四年四月一七日に処刑された。著者は最後に「白色テロ」の影

響として、一九九〇年代に入りロシン・ワタンが名誉回復され、一九九三年に銅像が建設された時のことを記している。各地から多数の人が参集し、盛大な式典が催されたものの、地元である復興郷の人々は郷長も来ず、一般の人の参加も少なかったという話である。評者はたまたま今年二月に、桃園市復興区（旧復興郷）を訪ねる機会があり、ロシン・ワタンの銅像を参拝した。残念ながら銅像の周囲は荒れ地状態となっていた。もちろん一九九三年と二〇一六年は年月が隔たり、またたまたま手入れ前だったのかも知れない。とはいえ、故郷を見下ろす場所に銅像として立つロシン・ワタンは、郷土についてどのように思っているのか、聞きたくなかった。

以上のように本書は各部、各論文ともそれぞれ内容の濃い興味深い論文が並んでいる。では本書の全体はどのように評価できるだろうか。

まず本書は共同研究のシンポジウムであって通史ではない。よって、近代台湾の経済社会の全体像を求めようとする

と、水利についての議論として水利会組織の変遷を論じた薛論文と嘉南大圳の先駆者の一人となった相賀照郷に言及している湯原論文があり、清代漁塢として貴重な資料発掘を行った楊論文があるものの、近代台湾の社会経済を規定していた農業経済そのものに切り込んだ論文がないので、あるいは失望するかも知れない。また原住民についての議論が、四本柱の一つに掲げられているにもかかわらず、菊池論文がロシン・ワタンおよび曾文亮が原住民の法的地位に言及している限りなのは物足りない。菊池論文の載る第六部は、確かに「戦後再建」を内容とするが、他の部にも戦後再建に関するものが並んでおり、失礼ながらそれらの部に入らないその他扱いという感がある。評者が思うに原住民の専論で一つの部門を構成するのが難しくても、原住民族学で言及する等、もう少し載せたかった。とはいえ、東亜同文会・東亜同文書院についての新たな知見を台湾と並べて議論できる機会は貴重であるし、また法制の伝承と形容、さらには経済変遷について

は、台湾側の多数の報告者により、多面的な議論が展開できているように思う。ここでさらに同時代を研究する日本史や朝鮮史の研究者と、異種格闘技的な議論を重ねることができれば、より多面的な台湾像が明らかになったかと思う。もし次回に同様な企画があつて、日本でシンポジウムが開催されることとなれば、是非とも異種格闘技的な議論をお願いしたいところである。

なお台湾側の論文の多くは中国語で著され、日本語に翻訳されている。翻訳者の労苦はしのぶべきではあるが、誤訳が見られるのは残念である。

末尾になつたが、評者はシンポジウム報告者であるにもかかわらず、科研申請等諸事情により別雑誌に論文を掲載したため（そしてその論文をさらに進展させた論文の完成が二〇一四年になつたため）、本書に論文を掲載できなかったこと、本来この書評は早期に脱稿するはずが、大幅に遅延したこと、この二点を馬場先生をはじめとする関係者にお詫びしたい。